日刊ゲンダイ
200円 消費税込み
12月22日(月)
[2025年・令和7年]120日発行
第三種郵便物認可
https://nikkan-gendai.com

私が考えました

フジタ代表取締役 藤田豊博さん 前編

「温暖化対策の切り札」と業界注目 常緑キリンソウ

水やり不要、冬も枯れず 酷暑でも極寒でもビルの屋上で生き続ける常緑植物

自ら品種改良したキリンソウを手にする藤田社長

「雑草が生えない」「土が飛ばない」「水やり不要」という規格外の特性を持つ「常緑キリンソウ」という植物が、いま屋上緑化の救世主として注目を集めている。「温暖化対策の切り札」として期待されているのだ。

「常緑キリンソウ」は、鳥取の小さな緑化植物生産会社が独自開発した品種で（品種名＝トットリフジタ1号・2号）、マイナス30度から50度の高温まで生息可能。乾燥にも強く、水やりをしなくていい。

さらに同社の開発した「常緑キリンソウ袋方式」は、ポリプロピレン製のファスナーの付いた袋に土を入れて植え付け、ビルなどの屋上に敷設する。こうすることにより保水能力が高められ、豪雨の際の土壌流出や雑草侵入も防げる。設置も簡単なことから、主にゼネコン向けに導入が進み、ビルや団地、高速道路のインターチェンジなどに導入されてきた。保水力が高いことで、台風による豪雨被害がこれまで多く発生している地域からの需要が見込めるほか、さらなる温暖化が需要に拍車をかける。

屋上緑化の切り札とされる

▼ふじた・とよひろ　鳥取生まれ。祖父が創業した植物園を営む家系の3代目。独学で常緑キリンソウの品種改良に取り組み、約10年かけて冬でも枯れない品種の開発に成功。独自の「常緑キリンソウ袋方式」で特許を取得し、屋上緑化市場で存在感を高めている。

10年かけた「奇跡の1本」誕生秘話

創業者である祖父は、もともと名古屋で練炭会社を営んでいたが、次第に植物収集に転じ、中国や東南アジアなど、まだ開拓されていない地域で人脈を使って植物採集を行うようになった。その祖父が日本の気候に適した植物を求めてヨーロッパを視察し、たどり着いたのがキリンソウ（麒麟草）だった。

父の代では切り花生産を行っていたが、3代目の豊博さんが観葉植物園へと展開。育て方が分からず約8割が枯れたが、残った2割で人を集めた。花市場から買ってきたものを展示する一般的な植物園とは一線を画し、珍しい姿形の植物や、土を使わなくても育つ植物など、独自性で勝負した。ところが――。

「阪神・淡路大震災の影響で集客が止まり、観葉植物園は頓挫。当時注目され始めていた緑化事業へと舵を切りました」

当初はセダムなど一般的な緑化植物を扱っていたが、より耐久性が高く扱いやすいキリンソウの可能性に気づいた。ただし、当初のキリンソウは冬に枯れて春まで成長しないという課題があった。

品種改良は困難を極めた。おしべとめしべを掛け合わせる手作業で、さまざまな種を交配させ、よく伸びるものを選別して再度交配する。大手種苗会社でも、研究員が30～40年で1品種出せればいいとされるほど難しい作業だ。

「思いが通じたのか、冬も成長する常緑キリンソウができたんです」

科学のように確実性はない。本当に奇跡の1本ができ、それをクローン（挿し木）で増やして品種登録した。10年以上かけた執念が、ついに結実した瞬間だった。

しかし、製品としての完成には、さらなる試練が待っていた。導入現場では土がなくなる問題が発生。高層ビルでは風で飛散し、屋上緑化では土が薄く、半分以上なくなってしまう。

雑草対策として防草シートを使用したが、ナイロン袋は焼却時にCO₂を排出し環境に悪い。生分解性素材は3カ月で腐って草が生える。不織布の防草シートに変更し、カッターで切って植栽していたが、切りすぎによる雑草の侵入が課題となった。そこで浮かんだのが、奇想天外なアイデアだった。

（聞き手＝いからしひろき）

＝つづく